

子どもに伝えて（1） 自分を楽しむ

松本 康子

次女に、「お母さんは、親として何か子どもに伝えたいと思って子育てしてる？」と聞かれました。「はい、それはいろいろありますよ。」人生一度しかないから、しっかりいまの自分を楽しんでね。

子どもの一生を考えるなら、親元を離れて（我が家ではみな大学進学により）生きる時間の方が圧倒的に長いでしょう。手元においてする子育ても、子どもが学校へ行きだすと、子ども自身が自分だけの時間を作ってしまうので、実際に親の手を煩わす時間はどんどん短くなります。親子で会話が成り立って初めて、自分のやり方で子育てになっているのかどうか、相手の反応をうかがうことが出来るのにもかわらず。本当に、親子関係でいられる時間の、何と短い事か！ 絶対の自信を持って子育てをやっているわけではありませんが、子ども達の独立まで、いろいろな思いを抱いてその成長に手を貸してきました。子ども達が、自分達が自分の生き方を楽しめるような人間になるよう、ない知恵をしぼって伝えてきたつもりなのです。「お母さん、それ勘違い！」と言われようとも。

< This is an English conversation program. >

私が英語に触れだしたのはおおよそ半世紀前、小学5年生の頃から始まります。4つ違いの姉が、大学は絶対にアメリカ留学するのだとあって、高校生になったばかりの頃から、NHKのラジオ番組「英会話講座」を、毎晩聴いていました。バック・ミュージックとともに“This is an English conversation program.”というタイトル・ロールで始まる、日本人離れした松本亨氏（故人）の発音が印象的で、自然に私の耳にも入っていました。

ところで、私の書いたエピソード「須磨事件」をお読みになった方は、この姉の破天荒ぶり、やりたいことはすぐに実行する性格の人だったことをご記憶でしょうか。姉が高校2年生のある日、突然、我が家へミシシッピー州から来ていた女の子、ベニーを連れてきました。姉の留学は本気で、親の説得は是が非にでもの強硬手段として。種明かしをしてくれたところ、アメリカの事はアメリカ人に聞くのがいいと、いつの間にかアメリカ人でしかも大人の友人を作っていました。その方のお嬢さんを、日本での異文化体験のつもりか、

家へ招待したのです。

その当時から神戸は、歴史的にも外国から来た人たちが住みやすいのか、よく街中で見かけました。そんな環境に慣れたこの両親も、高校生のわが子がどこでアメリカ人と知り合ったのかとびっくり仰天するやら、前触れなしでの外国からのお客さまを、一体どうもてなしたらいいのかと大慌て。豪胆な姉は「大丈夫、大丈夫。親との約束で1時間くらいしか

いられないから、言葉の通じないところは身振り手振りでいいのよ。」と。その姉の行動で、ラジオでしか聴く事の出来なかった英会話を、私は生まれて初めてなまで聞いたのです。その後も、姉の英語へのアプローチは尽きることなく、洋楽やハリウッド映画などをどんどん家へ持ち込んできました。生まれて初めて観た映画はウォルト・ディズニーのアニメーション「白雪姫」で、姉の影響で音楽はエルビス・プレスリーのロックン・ロールナンバー。毎日真似たものです。洋風の音楽と映画は私の一番好きなものとなり、英語に対する興味はそれに比例していきました。



< 子を思う親心 >

この姉の英語への傾倒の基礎を作ったのは、多分、父の影響からだったと思います。父に授かった子どもは女の子3人でした。父は「女性」に対してとてもリベラルな考え方を持った人だったのでしょいか、大正生まれの人にしては私たち女の子にも教育熱心でした。私たちが成人する頃の世の中がどのように変わっていくか、その見解を小さい頃から言って聞かせました。いわく、「世界の経済競争が進み、今よりもっと英語が必要となる。女性にも社会進出の機会が増えるはず。」そして、「残念な事に日本では、まだまだ子育ては女性がするの当たり前だから、母親が社会経験することで、それなりの子育てが出来るはず」という考え方をしていました。男性社会へ出る女性の有効な手段は英語だという確信から、その勉強にかかわるサポートはしましよ、という家庭